



特定非営利活動法人ジャパンハート最高顧問・医師

吉岡秀人よし おか ひで とさん(53歳、片山町4)

途上国の医療現場に立つ意味

あふれんばかりの思いに乗って次々と言葉が紡がれていく。たぎる意志は時折見せる現実を貫くような鋭い眼差しにも表れていた。

彼の舞台は主にミャンマー、カンボジア、ラオスなどの発展途上国。1995年から無償で診療と手術を始めた。2004年に国際医療ボランティア団体・ジャパンハートを設立。これまで数えきれないほどの命を救ってきた。

学生時代、報道で発展途上国の飢えた子供を見て衝撃を受けた。海外の苦しむ人を助けられる方法を考え、たどりついたのが医者だった。渡航を決意したのは、ビルマ戦線で亡くなった旧日本兵遺族からの声だった。「身内を亡くした土地で現在多くの人たちが病気で死んでいくのを、遺族は憂えていた。戦後50年の節目を迎え、新たな慰霊の形を模索していた彼らから『身内が亡くなった土地で人を助けることが新たな慰霊になる』と説明されたとき、断る理由はなかった」。言葉や国内情勢も分からぬまま、すぐに現地に向かった。

ミャンマーでは、病気や貧困に苦しむ子供が多い。活動当初、診察を待つ患者が毎日押し寄せた。患者を見た現地人スタッフが「かわいそうだが病気はしかたが

ない」と言った。医師や治療が貴重だという現状を表すひと言に胸を痛め、診療所を開くことを決心した。

今に全力を投じて最高の治療をする、これが彼の信念だ。だから、十分な設備がなくても術後数年しか生きられないと分かっているでも彼は治療する。「過去の苦しみは取り除けないが、これからの希望は与えられる。設備不足などで大変なことはあるが、今できる最高の治療をできたときが一番幸せ」。現在も海外で活動を続けており「メスを使わない『助ける』もある」と病児や孤児の養護施設の運営なども行う。今後は受診の負担を減らすべく、吹田市とミャンマーの市民団体から寄贈されたドクターカーを使い、巡回診療を開始する予定だ。

「助けた患者の幸せが感謝として僕に返り、幸せになる。活動を続けられるのは、自他ともに幸せにできる最高の場所がここだと信じているから」。

自分を幸せにできる人が他人を幸せにできる。求める声がある方へ、また飛び立つ日はそう遠くない。



渡航当時の様子